

日中学生間の友人形成に関する理論的・実証的研究

同志社大学 李文

1 目的

この報告の目的は、日本人学生と中国人留学生の友人関係を理論的かつ実証的に分析し、その友人づくりにおける問題点を見つけ出し、日中学生間の友人関係の研究を基礎づけるとともに、今後の研究の方向を確認するものである。

2 方法

そこで、データとして報告者の中国人留学生 10 人を対象とした半構造化インタビュー調査の結果と、報告者が参加した京都の日本人学生 170 名を対象とした質問紙調査の結果を分析し、山岸俊男の「信頼」理論から考察をおこなった。

3 分析

日本人学生を対象とした質問紙調査の結果からみると、全体として日本人学生は、「中国人一般」に対してよりも「中国人留学生」に対して良いイメージをもっているにも関わらず、実際に中国人留学生と友達になろうとする意欲は、メディアを通じて得る両国間の政治的関係に影響されている。それを山岸の信頼に関する理論から分析するならば、日中関係の悪化が社会的不確実性を高め、日本人学生の「取引コスト」が高くなることにより、中国人留学生との友人関係の形成をむずかしくしている。

他方、日本人学生の「中国人留学生の知り合いの数」からみると、知り合いが多いほど、中国に対するイメージがより良くなり、友人関係の形成にもより積極的な傾向がみられる。それは、コミットメント関係の形成が、社会的不確実性を低下させるという理論から説明できる。すでに形成された日中学生間の友人関係は、両国の政治的関係という社会的不確実性の影響を小さくし、中国人留学生に対する信頼感にはあまり影響がないということであろう。しかし、日中学生が個人レベルのコミュニケーションに気遣うあまり交流を抑えることによって「友人づくりのジレンマ」が生じ、友人関係ができにくい「意図せざる結果」になる可能性もある。

友人関係は相互的なものではあるが、コミュニケーションは日本語で行われることがほとんどであり、その「タテ型社会」の特質から中国人側からのコミットメントがむずかしいため、日本人学生から中国人留学生への積極的な友人づくりの行動が不可欠であることが、インタビュー調査を通じてあきらかになった。

4 結論

以上から、日中両国の政治的関係や相手に対するイメージは、中国人留学生の友人がいない人に特に影響を与える。他方、中国人留学生と友人関係を形成した人の場合、そのコミットメントが社会的不確実性を低下させ、両者の信頼関係への影響を少なくすると考えられる。

文献

山岸俊男, 1990, 『社会的ジレンマのしくみ——「自分1人ぐらいの心理」の招くもの』サイエンス社.

山岸俊男, 1998, 『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.

山岸俊男, 1999, 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』中公新書.